平成２５年度（基盤研究（S））研究概要（採択時）

【基盤研究（S）】
理工系（工学）

研究課題名　わが国における都市史学の確立と展開にむけての基盤的研究

東京大学・大学院工学系研究科・教授　伊藤（いとう）　毅（たけし）

研　究　分　野：　建築学
キ　ー　ワ　ー　ド：　都市史学

【研究の背景・目的】

1980 年代以降本格化したわが国における都市史学は、いまだ個別分散的であり一つの学問領域に統合されるには至っていない。都市史学は学的融合が不可欠な分野であり、これを実質的に担いうる研究者が限定されることがひとつの原因である。本研究はわが国における学際的都市史学の牽引者・第一人者が一堂に会し、この間蓄積してきた学的達成、人的ネットワーク、国際的連携実績を一挙に結集し、わが国における都市史学の組織基盤を確立するとともに、このプラットフォーム上で最先端の研究論題を全面展開し、成果を社会化することを目的とする。

都市史学はいまや全世界が直面する都市的危機の淵源を再考する基礎的・総合的学問領域である。この基盤形成と研究展開を通して、若手研究者の育成および研究成果の国内外への発信と還元をはかる。

伊藤毅（建築史）と吉田伸之（日本史）は四半世紀に及ぶ研究連携の実績と、その一つの到達点としての『伝統都市１～４』（東京大学出版会、2010 年）の出版を対象として 2012 年日本建築学会賞（業績）を受賞した。この受賞理由のなかに、都市史学の今後の展開のための基盤形成について大いに期待する文言が含まれていた。各研究分担者はすでに高度な学的達成を行い、その下で有力な若手都市史研究者が分厚い裾野を形成している。いまこそ都市史学統合の好機が到来したというべきである。

【研究の方法】

本研究は都市史学の基盤確立と研究論題の 5 年次にわたる段階的展開のために、周到かつ明快な研究計画を策定している。すなわち、①都市史学センターを中核とし、5 つの主要な研究部を設置し、その下部に多くの都市史研究者を組織し、それを徐々に充実化すること（A 組織）、②5 つの研究論題は各年度の主要なテーマとなり、そのテーマを発展させるためのサブテーマを各 3～4 本ずつ立てる。サブテーマはその年度の国内外集会の柱として、主要交流国および関係諸国との都市史学シンポジウム・講演会・ラウンドテーブルなどで成果を集積する（R 研究）。研究成果のアウトプットは年度ごとに達成度を自己点検しつつ着実に進め、研究期間中から成果物の公開をスタートし、研究期間終了後一気に書籍化・ウェブ公開を実現することになる（O 成果）。

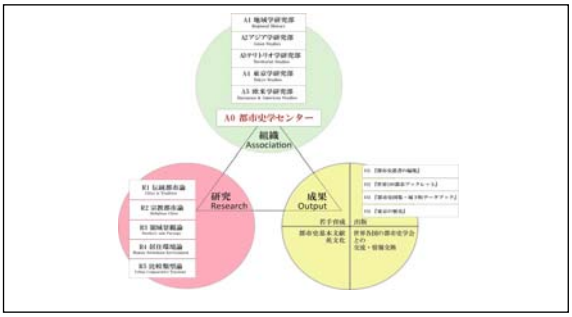

図１組織・研究・成果

【期待される成果と意義】

本研究で展開する論題は以下のようである。

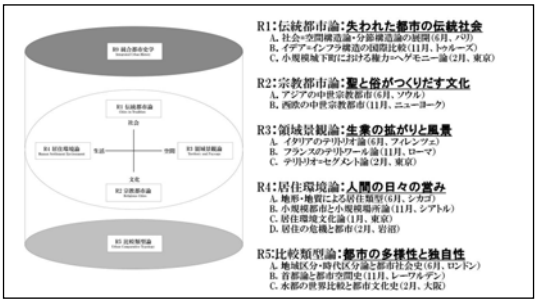

図２研究論題構造図

R 統合都市史学（都市社会史／都市空間史／都市文化史）。これらは R1 伝統都市論（吉田・伊藤）社会=空間構造論／権力・ヘゲモニー論／イデア=インフラ論、R2 宗教都市論（高橋・樺山）日本宗教都市論／アジア宗教都市論／欧米イスラム宗教都市論、R3 領域景観論（伊藤・陣内）テリトリオ=セグメント論／景観構成論／沼地・荒地論、R4 居住環境論（陣内・高橋）居住類型論／環境文化論／危機都市論／小規模場所論、R5 比較類型論（樺山・陣内）地域=文化構造論／首都・世界都市論／水都・ネットワーク論など多岐にわたるが、その成果は『年報都市史研究』（山川出版社）、都市史叢書（上記 R1～R5 の成果を統合した論集、世界 100 都市ブックレット、都市史図集・城下町データブック、東京の歴史（全 10 巻、吉川弘文館）、都市史基本文献の英訳化（電子ブックとして作成）として結実し、わが国の都市史学の確立と展開に向けての堅固な基盤を形成する。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

・吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市１～４』（東京大学出版会、2010 年）
・伊藤毅編『バスティード－フランス中世新都市と建築』（中央公論美術出版、2009 年）

【研究期間と研究経費】

平成 25 年度－29 年度
144,000 千円

【ホームページ等】

http://suth.jp
office@suth.jp